『比較日本文化学研究』第 12 号（2019）

論　文

雑誌『かむろ』から見る女性の地位と役割

―― 恋愛・結婚を通じて ――

劉　　王 奇 思

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

A study of the status of women in Okikamurobased on the magazine "Kamuro": through the amativeness and marriage

LIU Wangsiqi

Abstract: Okikamuro is a small island located adjacent to Sue Oshima in Yamaguchi Prefecture, Japan. And there is a magazine named "Kamuro" belongs to Okikamuroseiseikai. At the beginning of Taisho, the problems of women did not receive much attention from the society. However, in "Kamuro, there are so many articles about women. This paper is focused on amativeness and marriage. Through classifying and analyzing the articles about Yobai, amativeness, the efforts women do for getting married and divorce from "Kamuro", we can know that the custom of Okikamuro, the view of unmarried women are behind the central cities. No matter what happened, the wrong one will be the women, and no one thought the men also make mistakes in daily life. Women were blamed at getting married by only attracted by the men's look not by the character the men had and the men's family style. What's more, the divorced couples' name will be record in "Kamuro" which makes the women poorer and the villagers will say their bad words together. Based on the result of analyzing, the status of women on the island can be demonstrated more clearly.

Key word: Okikamuro, "Kamuro", Yobai, amativeness, marriage, the status of women

1. はじめに

女性の生き方はそれぞれであり、異なる地域では女性の地位や役割も異なってくる。例えば、東北地方の奥歯山脈の両側にそって姉家督制度があり、長子が女の子である場合は養子をもらい、女にあとをとらせるが、宮城県栗駒町などでは、女の子全員が家から出ず、養子をもらって分家させるものが多かった。また、佐渡では、結婚の話は大体親が決める。そして結婚してか

ら、婚家で着物の洗濯する時間もないほど一生懸命に働くため、盆正月の前に一週間から十日間、自分の着物と夫のものを持ち帰って洗濯するというセンタク帰りがあった。石川県能登地方や、佐渡、新潟県北部には大正時代まで月の半分は婚家で働き、半分は実家で働くという婚家と親元を往復する「日をとる嫁」があった。さらに、長崎県対馬では、貞操より婚姻の質を大事にしている。昭和25（1950）年ごろ、島のばあさんが「男と女は誰でも二、三べんはついたりはなれたりする」と話した。夫を気に入らなかったら女の方から家を出て来るという風習は対馬だけでなく、瀬戸内海地方にも広く見られた[1]。島では女性の地位がより低く、特に一家の主婦になる前の女性は労働力と見られ、忙しい日々を送っていた。

周防大島は瀬戸内海の第三の大きな島であり、沖家室島は周防大島東和町の付属島である。沖家室島は漁村として漁業が本業と思われ、遠洋漁業が発達し、台湾、ハワイに出稼ぎする者も多数いた。しかし、漁業だけでは島民全員が生きていけるわけではないから、朝鮮、中国、アメリカ、カナダにも漁業でない出稼ぎに行く者もたくさんいた。出稼ぎ者との連絡および情報交換が、沖家室惺々會が『かむろ』を発行する最初の目的であった。そのうち、情報交換の他に、島民たちの思想啓蒙という役割も果たしていた。女性問題を調べているうちに、沖家室島の沖家室惺々會が発行していた会誌『かむろ』に特異な形で女性の日常状況などを記録していることがわかった。

そして本稿では、沖家室島を対象とし、会誌『かむろ』にある恋愛・婚姻に関する記事を分析し、大正期における沖家室島の女性の地位と役割を考察していく。

2. 夜這いとその消失

夜這いというのは娘の家に忍び込むことである。明治時代では、夜這いはどこにも見られた。夜這いによって、結婚に発展する者は少なくなかったが、そうでない者も少なくなかった。また、男女ともたくさんの相手と関係を持つ者はいる。女性の場合、結婚することになると、そういう関係の持つ相手に紺の足袋を送り、「この度限り」の意味という。大正時代に入って、電灯がともるようになってから夜這いは少なくなってきたが、昭和十五、六年ごろまでまだ見られた。そして、戦前では夜這いを不道徳なこととして文章にすることはほとんどなかった[2]。

しかし、『かむろ』では大正 4（1915）年からもうこの現象をひどく批判していた。

『かむろ』第 2 号（1915 年 1 月）では、「敢て在郷青年婦女の一考を促す」（署名朝鮮一青年）という記事がある。

> 「聞け在郷の諸君、百鬼夜行の醜態は、陰に陽に演ぜられつゝあるにあらずや。懲戒を加ふる士なく、色魔は當然の事たりと思し、目的の遂行を誇るまで、品性下劣に陥りしにあらずや。單刀直入在郷未婚の青年婦女に発問す。多數の子女の中に、品性の正しき青年、無垢の處女果して幾人ありや。弊害になれて、貞操の品性に如何なる價値あるを知らざるにあらずや。貞操を玩具視して可なるものなりや。貞操を賣物視せる賣女の社會より忌憚せらるゝを知らざるや。吐他日良妻たり賢母たらざる可からざる者が……されど女は弱し。子女の終りを全ふし得ざる罪は、男子其の大半の責を免る能はず。反省せよ青年諸君、反省せよ婦女子の君。愛郷の士、同志の者は奮然起る、利刀はすでに鞘を拂へり。」

上記はこの記事の一段落である。「百鬼夜行」は夜這いを指していると考えられる。つまり、夜這いは悪風習であり、するべきではなく、女子も自分の貞操を重視すべく、良妻賢母になるための行儀作法を身につけたほうが自分のためである。また男子も正しい品性を養い、沖家室を発展させるべきと島民の注意を喚起している。

また第 5 号（1915 年 11 月）では「若い衆へ」（署名おなべより）という記事にも、「夜中私共のところへ遊びに来て下さるのは、少々時間がおくれたとて、露程も氣にはかけません」が、用事のある時は引きとめないでほしいと書いてある。この記事も大正 4（1915）年頃、夜這いはまだ存在していることを証明している。

そして、第 38 号（1921 年 6 月）の「處女会の實行要目」では、「親の許なくして外出すべからず」、「外出の時は行先を家族に告ぐべし」、「夜間の外出を慎むべし」、「青年寄合の場所には立寄らざること」などを明記し、女子の自由、特に夜の行動を制限し、男子との距離を置くようにさせた。しかし、おもしろいことに、『かむろ』の記載によると、女子部といい處女会といい、例会の開催はほとんど夜であった。そしてついに、第 41 号（1921 年 11 月）の「公開状沖家室處女會ゝ長西山雅助氏の明答を望む」という記事では、處女会は「女性として最も必要なる行儀作法を授かり又は有益なる講話に依て

心身の修養に努むる」のに、「何が故に例會を夜間開催せらるるや、吾人は司會者の教育家なるだけ一層質疑を深くし且つ尤も遺憾と」感じ、「元来婚期を前にせる處女の夜間外出することは本人自も慎むべき」であるけど、「夜間處女を集めて青年男女に接近の機會を」与えるのは大きな問題であるし、「男女の風紀を紊す如き所爲ありたる節は司會者は其の責を如何にして償はんとはするか」と問いかけた。この質問に対して、第42号（1922年1月）の「公開状に答ふべく立つて」にて応じた。当時、處女会会長が西山雅助から小松秋太郎に交代した。「公開状」に対して、小松氏は「青年處女の智能を啓發して、自覺を高め」たら例会の開催は昼であろうか夜間であろうか関係ないが、「處女には共々周到の注意を拂つて居る」と述べた。

前述のように、夜這いは電灯がともるようになってから少なくなってきたが、『かむろ』では、大正7（1918）年7月に初めて電灯をつけたらいかがでしょうという内容があった。そして大正11（1922）年頃電信架設が完了し、電灯がともるようになった。つまり、沖家室における夜這いの現象は大正11（1922）年から少なくなるようになると推測できるが、上記第38号と第41号の内容を合わせて見ると、大正10年頃から女子の行動自由を制限し、處女会の講演などによって修養を積んできたことから、大正10年頃から夜這いはもうすでに減少しつつあるのではないかと推測できる。

3. 娘の恋愛事情および自意識

昭和40年代にまだ大島では娘たちが花嫁修行を行われていた。裁縫の他に、家事見習いも娘にさせた。しかし花嫁修行は女中奉公から来たものであり、女中奉公から戻って来た娘たちに話を聞き、町の生活に憧れ、奉公に行ってしまう。最初は親は娘が帰らなくなることを心配し、その行動を許さなかったが、娘は黙って家を出て奉公に行った。明治に入って女中奉公に行かない女性がほぼいなかった。結婚式が華やかになることにつれ、女中奉公が親を助けるためのものから、自分の嫁入支度のためのものになってきた。そして奉公によって行儀作法を習い、食べ物ごしらえが上手になったら、いい嫁入り口ができるという[3]。

『かむろ』第27号（1919年10月）の「見たり聞いたり（一）」を見てみると、

「近頃上りの汽船毎に、三人五人と連れ立つて伊豫に行く娘さんが多い。何んの為かと聞いて見たら、下女奉公をするのだそうだ、其の目的は行儀見倣ひか、月給か、あさはかなる虚栄心よりか、三者何れにか属することと思ふ。（中略）今だ且つて幾何の貯蓄金を持ち歸りしとは耳にせぬ、（中略）居た時と僅か數ヶ月間後の彼れとを比較して、思想の著しく浮薄となり、勞働を厭ふの傾向が見へる。」

と書いてあるが、大正 8 年までまだ女中奉公に行くことが続いていることがわかる。しかし、娘たちは漫然としており、行儀作法を見習うより、島の厳しい状況から逃げようとしているように見える。

第 58 号（1924 年 9 月）の「沖家室の處女に對する希望」もこの現象を証明している。

「『伊豫で女中奉公をして何を需めんと思ふのか』と問へば白粉をつけることゝ、美装して異性の標的とならんと答へ、『女工になつて何を得んとするか』と問へば、嫁入りの帯を得るためと答へるたろう、餘り舊思想ではあるまいか。」

沖家室島の娘たちは自分の教養や能力を高めるより、男性の目を引くことや嫁入りの準備に目を当て、自分が美しければよりいい男性が寄ってくるあるいはお金がたくさんもらえるという考え方がずっと前からあるらしい。第 40 号（1921 年 9 月）の「うわさの立聞き」によると、島の女子はある女性がお嫁にいく時一万円をもらったことを聞き、

「それ程澤山なお圓が貰はるゝのだつたら、よしんば先はお老人でも、少し位不具者でも、後入れでも、眞當に結構ですわ、兎角美人には生れたいものね……妾等見たいな醜婦ではどんなに汗水流して働いて居てもさ、あの女は感心だと云つて何所からも貰ひが掛りませんのが笑止ぢやありませんか、お互様と今度生れます時に美人に生れませうね」

と投稿者が道端で聞いた。愛よりお金、楽に生きることを選ぶということである。しかし、それが必ずしも幸せになるとは限らない。こういう思想を持つ者が多数おり、それが島の離婚率につながっていく。

第 51 号（1923 年 5 月）『かむろ』の「處女の向上心と貞操観念」では、「元来配偶者の選擇に就ては、自己の一身を父母の選擇にのみ任せて止むべきにあらざると共に、選擇を子女の自由意志に絶対任すべきものでもありません」と述べた。若い男女に自由恋愛してほしいが、親もちゃんと子供の結婚相手

を選ばなければいけない。また娘たちに貞操観念を持たせるのが親の責任であることをも強調した。同号の「島民と生活の享楽」では、島の男女は年頃になるとすぐ結婚すると思い、慎重に考えずに結婚する者は幸せになるはずがないと主張し、配偶者を選ぶには「物質的方面」の他に「精神的」方面、「人格と体格」も重要であり、「容貌」はそれ以下であると述べた。

それから何年間、投稿で自由恋愛をし、結婚相手を選ぼうという呼びかけが絶えなかったが、第二次世界大戦が終わっても見合い結婚の者が数多くいた。しかし、見合い結婚した者が恋愛結婚の者より長く付き合う夫婦数が多い。

ここでことに『かむろ』第38、39、40号の記事を挙げたいと考える。

まず第38号（1921年6月）では、「かむろ記者様へ」（署名某女）という記事がある。某女は雑誌に統計表のような未婚女子一覧表があり、買い物のための安っぽい広告みたいことに不満を持っていた。またずっと嫁に行っていない娘の名前がずっとそこに残されて、村人に陰口を叩かれることに苦労する者がおり、そして離婚は女性に対して悲惨なことであるのに、雑誌に離婚者の名前まで出ていることが女性をもっと不幸にさせたと述べた。皮肉なことに、この記事についで、名前、年齢、誰の何番目の娘を載せている「處女人名」という記事が出ている。

そして第39号（1921年7月）では編輯者から「某女に呈す」という某女への返事があった。この記事によると、「かむろ記者様へ」の中に言及した問題は某女だけでなく、「大同小異の批難の聲を屡々耳に挾んで居た」とのことである。その非難に対して、編集者はまず「處女人名」の「掲載の不可なる理由を少しも見出しません」ので「今後も掲載」すると答え、また婦女子の名誉を毀損することは一切載っていないし、自分に関する記事が出ていないかと心配し続ける某女が神経過敏のではないかと反論した。残念なことに、この記事の後半は頁が欠落しているため、内容は明確ではないが、おそらく離婚人名の件についての説明であろう。

さらに第40号（1921年9月）では「第三者より見たるかむろ記者様への某女に」という記事では、まず「吾等の交友間では貴女の何者かと云ふ疑問が話題となって屡々推測を下し」、貴女は「真の勇者」、「女性の先駆者」と称賛した。そして、離婚者の名前を出すことは某女と同じく、無情のではないかと考えた。しかし、處女人名の掲載についてはそれほど抵抗がなく、「青中

年の多い海外在住者、忌憚なく云へば未婚男子の少なからざる海外在住者に配偶選擇の便宜を能ふることは、在内外の連絡機關として當然記者の報道すべき義務を有することと思ひます」と述べた。また同号の「葉書通信」の中に「某女様先月の貴稿には私も同感です聲援は致しますから大いに遣りなさい（同情生」という通信があった。

「某女」は「第三者」の言うとおり「女性の先駆者」である。同じ不満を持つ者が多数いるようであるが、文章にまとめて投稿し、投稿が掲載されることで、正体がバレ、他人から非難を受けるリスクを冒しながら、比較的に権威の持つ男性に挑戦するにはとても勇気が必要である。特に「處女人名」掲載の抵抗は進歩的であった。しかし、編集者からの返事は女性を見下すような口調をしており、「某女」の主張を全面的に否定していた。また、「第三者」の投稿にも、「某女」の言ったことを理解できるが、「處女人名」は沖家室島には必要だと主張した。自由恋愛の意識がなく、自分が商品みたいに選択されることに恥ずかしいと思わないのが一般的であろう。また、「海外在住者に配偶選択の便宜」と強調し、まるで海外在住者だけを目標として早く結婚したいと言わんばかりに、愛より虚栄心で結婚すると考えられる。これも不幸な離婚に繋がっていく。

4. 離婚率の高い沖家室島

夫を気に入らなかったら女の方から家を出て来るという風習は瀬戸内海地方に広く見られた[4]が、沖家室ではそれが一大問題として取り上げていた。それは、離婚に至る理由にあると考えられる。

「男も女も年頃になれば何んでもかんでも結婚せねばならない様に思つて、随分乱暴な結婚をする」[5]ことが離婚に至る原因の一つであろう。結婚は人生の大事であり、年になったから結婚するのではなく、もっと慎重に考えて調査してから行うべきである。「先方の系統家族の状態、家族の風儀、妻となるべき者の性質素行等を調べねばならぬ」[6]。そして、自由恋愛による結婚は、頭が冷めると、相手の欠点が見え、素性がバレるようになり、離婚に至った者も多かった。

次に前節にも述べたように、沖家室島では結婚について考え方があまりにも甘く、「男子の容貌や、言動」といった「表面的のことしか目に留まらな」く、結婚して同棲して見ると「家系が悪い」と思い生家に戻ったり、「夫が放

蕩するから」といって別れたりする女性が多い[7]。

また、女性が「自己の生家に過度に厚意を注ぐこと」が「沖家室島に特に多い離婚の殆ど其の共通原因」である。婚家に内緒して生家にお金をあげたり、婚家の人間より生家の親族に厚意を表したりし、こういった「行為が度重つて家庭裡に不和を来し、不和が高じて遂に決裂を見るに至るのである」[8]。

さらに、女性は「夫の無情」や「姑の冷酷」を理由にして、「自己の非を掩はんとする」ことは一種の「詭辯」であり、「不縁の多くは女の我儘勝手と貞操観念の薄弱に基けるものと斷定を下すを至當とする」[9]と指摘する記事があった。

上記の原因から見ると、離婚に至ったのはほとんど女性の責任であるということになる。女性が男性の外観だけを見て、性格や家柄を知らないで結婚するから離婚する。女性が婚家より生家によくしているのがダメだから離婚する。女性は離婚が夫や姑に問題があるといいつつ、自分のことを反省しない。女性がわがままであり貞操観念が薄いから簡単に離婚できる。男性を責める記事はほとんどなく、またこれら批判に対して弁解や反論を書く者は一人もいなかった。つまり、沖家室においては、女性の地位は低いものである。そして一度離婚したことのある女性は二度目の結婚がより困難であることもわかった。しかし、離婚はほとんど女性が婚家から出てくるので、女性を責めるのも無理のないことであろう。また、女性の幸不幸より、女性に良妻賢母や親孝行という役割を果たしてもらいたいという思想が一般的であった。

5. 女性問題の先駆者

『かむろ』を読んでいくうちに、大正10（1921）年から13（1924）年までは女性に関する記事が極めて多かったことに気づいた。調べて見ると、第37号（1921年5月）から第63号（1925年6月）までの編集者は金井敏助であることがわかった。それでは、金井敏助は誰であろうという疑問を持ちながら、もう一度『かむろ』を読んでみると、詳しい情報が出てきた。

金井敏助氏は1914年に朝鮮開城府で商業をしており[10]、1915年4月までは開城支部長であり[11]、「活動的青年の範として在郷の會員は敬愛」していた[12]。そして1917年までは開城の中田商店で店員として働いている[13]。朝鮮にいたことと、編集者を担当していた時に女性に関する記事を多さから考えると、『かむろ』第2号（1915年1月）の「敢て在郷青年婦女の一考を促す」

を書いた「朝鮮一青年」は金井敏助のではないかと考え始めた。そして第12号（1917年10月）の「開城通信」の署名は「金井生」であり、第13号（1918年1月）の「開城通信」では「前号の通信が餘り露骨に渡れるとかにて、當地の會員諸氏より手痛き攻撃を受け」た述べ、署名は「朝鮮一青年」であることから、「朝鮮一青年」の苗字が金井であることが推測できる。第15号（1918年5月）の「開城通信」では「「かむろ」号創刊以来、吾開城通信を擔當して、常に輕妙精致なる報導を齎らし、又個人として朝鮮一青年の名に依り、屡次侃諤の論を戰はし、「かむろ」誌上一異彩を放ちたりし、筆者の御本尊たる金井敬助君、去月上旬條忽として姿を没し、遠く北方に去りたる」と書いてあり、「朝鮮一青年」は「金井敬助」であることがわかったが、「敬助」も「敏助」も「としすけ」と読むが、果たして同一人物なのか。第6号（1916年1月）の「朝鮮地方在住者」によると、開城に「金井敬助」という唯一の中田商店店員がおり、また第10号（1917年1月）の「朝鮮地方在住者」によると、開城に「金井教助」という唯一の中田商店店員がいる。第13号（1918年1月）の「朝鮮地方在住者」を合わせて見ると、開城に中田商店店員をしているのは金井敏助になる。金井敏助と金井敬助と金井教助は同一人物であることがわかる。

つまり、『かむろ』に出た初めての女性に関する記事は金井敏助氏が書いたものである。その記事に対する島民の指摘がきたらまた反論を書き、大弁論になっていた。また編集者とした時も、沖家室の女性に注目し、見聞日記から島民の投稿、山口県版の女性に関する新聞まで数多く掲載した。

なぜそこまで女性にこだわるかというと、朝鮮に長くいたことが一つ大きな原因であろう。

当時の朝鮮は日本の植民地であり、欧米の女性論のほとんどは日本から流れていったが、当地女性の生活や風習を伺うことができる。朝鮮では男尊女卑の習慣があり、一家庭の主人が絶対的権威を持っており、彼に服従しなければいけない。今はだいぶ廃止されてきたが、婦人が外出する時長い服を被り顔だけ出していた。また単独で外出しないこと。そして男女の区別ははっきりしており、十分な距離を置く必要がある[14]。つまり、朝鮮では、女性の地位は男性より低く、また自分の名誉を守るには男性と距離を置き、自愛していた。ずっと朝鮮で生きてきた金井敏助氏は朝鮮の伝統観念の影響を受けたからこそ、沖家室の女性に言動を謹んでもらいたく、振る舞いの綺麗な女

性でいてほしいわけである。その一心で、『かむろ』に女性に関する記事を多く載せたと考えられる。

しかし、金井敏助氏の女性に対する考えは進歩的だとは言い難い。夜這いという悪風習の廃止については進歩的ではあるが、女性の自由を制限し、女性を汚れた者扱いし、また夫婦の不和や離婚に至る原因を女性に帰結することから女性に対する悪意を感じる。金井敏助氏の女性に対する見解は必ずしも正確なものではないが、彼の努力で島民たちが女性問題について真剣に考えるようになり、女性の役割および女性教育も重視されるようになってきたことは否認できない。

6. おわりに

本稿では、夜這い、娘の恋愛事情、離婚の原因を分析し、沖家室島における女性の地位および役割を論じた。沖家室島では、夜這いという現象は大正10年から減少しつつあり、その後島民も男女の夜間交際を防ぐために注意を払っていた。そして、自由恋愛結婚より見合い結婚の割合が大きく、娘たちに愛に目覚めて恋愛してから結婚しようという呼びかけがたくさんあったが、恋愛という名目の下で性的目的を果たす青年も少なくなかった。また、恋愛しているうちに結婚して、情熱が冷めると相手の短所が見えて離婚になってしまうこともある。島の女性たちは、愛よりも、男性の外観に注目し、また経済的な面が目に止まり、結婚というよりも、自分を売るというような現象があった。婚家もまた女性に良妻賢母の役割を果たしてもらいたく、親孝行もしてほしかった。そういった現象をひどく批判したのは『かむろ』三番目の編集者金井敏助である。彼は編集者を担任している間に女性問題がしばしば議論の中心になっていたが、悪いことがあるたびに、女性のせいにするのが一般的であった。しかし、100年も前の雑誌でありながら、多数の女性問題に着眼することを高く評価すべきだと考える。

今後の課題として、沖家室における女性の地位の変遷過程をもっと明確にし、そして女子教育の発展について研究して行きたいと考える。

付記

本研究は中国国家建設高水平大学公研究生項目の助成を受けたものである。

注

[1]『女の民俗誌』2001 年、宮本常一、岩波書店、pp.44-58

[2]『東和町誌』1982，宮本常一・岡本定，山口県大島郡東和町，pp.738-740

[3]『東和町誌』1982，宮本常一・岡本定，山口県大島郡東和町，pp.624-626

[4]『女の民俗誌』2001 年、宮本常一、岩波書店、pp.51-54

[5]『かむろ』第 51 号（1923 年 5 月）の「島民と生活の享楽」による。

[6]『かむろ』第 13 号（1918 年 1 月）の「結婚は人生の大事」による。

[7]『かむろ』第 58 号（1924 年 9 月）の「沖家室の處女に對する希望」による。

[8]『かむろ』第 59 号（1924 年 10 月）の「見聞日誌」による。

[9]『かむろ』第 57 号（1924 年 8 月）の「見聞日誌（一）」による。

[10]『かむろ』第 1 号（1914 年 9 月）の「消息」では、「朝鮮開城府商業ヲシテ居マス。在學當時ヲ思ヒ出シマセンカ」と書いてある。

[11]『かむろ』第 2 号（1915 年 1 月）、「第一回總集會記事」によって金井敏助氏が開城支部長であることがわかった。そして『かむろ』第 3 号（1915 年 5 月）の「役員の移動」によると、金「井氏は青年奮闘家の範、事務多端の旨を以て辭任せられ」たことがわかった。

[12]『かむろ』第 2 号（1915 年 1 月）の「開城支部々員名簿」では「活動的青年の範として在郷の會員は敬愛する切なり」と述べた。

[13] 第 13 号（1918 年 1 月）の「本島人名録」（大正 6（1917）年 12 月末調査）による。

[14]『かむろ』第 59 号（1924 年 10 月）の「朝鮮の風俗」による。

参考文献

論文・著書

大島町．1994.『周防大島町誌』．大島町役場編.

泊清寺（住職　新山玄雄）．2001.『かむろ復刻版　第一巻』．泊清寺

泊清寺（住職　新山玄雄）．2002.『かむろ復刻版　第二巻』．泊清寺

泊清寺（住職　新山玄雄）．2004.『かむろ復刻版　第三巻』．泊清寺

宮本常一．1997.『周防大島民俗史』．未来社.

宮本常一・岡本定．1982.『東和町誌』．山口県大島郡東和町.

雑誌

冲家室惺々會（1914 年）「消息」，『かむろ』第 1 号，p.29，冲家室惺々會

朝鮮一青年（1915 年）「敢て在郷青年婦女の一考を促す」，『かむろ』第 2 号，p.4，冲家室惺々會

冲家室惺々會（1915 年）「第一回總集會記事」，『かむろ』第 2 号，p.21，冲家室惺々會

冲家室惺々會（1915 年）「開城支部々員名簿」,『かむろ』第 2 号，p.26，冲家室惺々會
冲家室惺々會（1915 年）「役員の移動」,『かむろ』第 3 号，p.31，冲家室惺々會
おなべより（1915 年）「若い衆へ」,『かむろ』第 5 号，p.11，冲家室惺々會
冲家室惺々會（1916 年）「朝鮮地方在住者」,『かむろ』第 6 号，p.14，冲家室惺々會
冲家室惺々會（1917 年）「朝鮮地方在住者」,『かむろ』第 10 号，p.29，冲家室惺々會
金井生（1917 年）「開城通信」,『かむろ』第 12 号，pp.17–18，冲家室惺々會
中田想石（1918 年）「結婚は人生の大事」,『かむろ』第 13 号，pp.12–14，冲家室惺々會
朝鮮一青年（1918 年）「開城通信」,『かむろ』第 13 号，pp.25–26，冲家室惺々會
冲家室惺々會（1918 年）「朝鮮地方在住者」,『かむろ』第 13 号，p.54，冲家室惺々會
開城支部（1918 年）「開城通信」,『かむろ』第 15 号，p.20–22，冲家室惺々會
飛耳張目生（1919 年）「見たり聞いたり（一）」,『かむろ』第 27 号，pp.27–28，冲家室惺々會
處女会（1921 年）「處女會の實行要目」,『かむろ』第 38 号，pp.31–32，冲家室惺々會
某女（1921 年）「かむろ記者様へ」,『かむろ』第 38 号，pp.32–34，冲家室惺々會
編集者（1921 年）「某女に呈す」,『かむろ』第 39 号，pp.32–33，冲家室惺々會
某生（1921 年）「第三者より見たるかむろ記者様への某女に」,『かむろ』第 40 号，pp.8–9，冲家室惺々會
番介（1921 年 9 月）「うわさの立聞き」,『かむろ』第 40 号，p.47，冲家室惺々會
秋水生（1921 年）「公開状沖家室處女會ゝ長西山雅助氏の明答を望む」,『かむろ』第 41 号，pp.26–27，冲家室惺々會
小松秋太郎（1922 年）「公開状に答ふべく立つて」,『かむろ』第 42 号，pp.28–29，冲家室惺々會
不明（1923 年）「處女の向上心と貞操観念」,『かむろ』第 51 号，pp.1–3，冲家室惺々會
S 夫（1923 年）「島民と生活の享楽」,『かむろ』第 51 号，pp.9–10，冲家室惺々會
不明（1924 年 8 月）「見聞日誌（一）」,『かむろ』第 57 号，pp.8–9，冲家室惺々會
S 夫（1924 年）「沖家室の處女に對する希望」,『かむろ』第 58 号，pp.12–13，冲家室惺々會
芳軒（1924 年 10 月）「朝鮮の風俗」,『かむろ』第 59 号，pp.13–14，冲家室惺々會
不明（1924 年 10 月）「見聞日誌」,『かむろ』第 59 号，pp.7–8，冲家室惺々會